

月刊

2014

10  
月号

# みんぱく

特集  
※

未知なる大地

グリーンランド

世界最大の島の自然と文化 岸上伸啓

四六〇〇年前からのグリーンランドの歴史 スチュアート ヘンリ

グリーンランド・イヌイットの文化 齋藤玲子

世界のなかのグリーンランド 高橋美野梨



# 光を探して

東北地方に大きな地震と津波がやってきた。気仙郡には一〇メートルを越える津波が押し寄せた。時は、一八九六年、明治二十九年、三陸地震のことである。

そのおなじ頃、ヨーロッパはヴィルヘルム・コンラート・レントゲンによるX線の発見に沸いていた。その年、X線の蛍光の研究をしていたアンリ・ベクレルが実験の途中、ウラン塩が写真乾板を感光させたことから「放射線」を発見することになる。そしてその翌々年、「放射線」の研究をしていたマリ・キュリーが「放射能」という言葉を生み出すことになる。「光」の歴史の幕開けである。

そのおなじ年、私の祖父、小林滋は愛知県あいちの拾石しゅうせきに生まれた。奇しくも彼はその誕生とほぼおなじ時期に生まれたレントゲン学を、X線・放射線学を学ぶことになる。上海事変が起き上海へ軍医として出征するまでは、弘前ひろさきの陸軍病院のレントゲン科で働いたという。戦後も町のレントゲン医として開業していた。

私が生まれるのと同じように入れ替わるように亡くなったので、私は祖父の記憶を持たないが、彼の写真は残されている。軍服を着た彼とその家族写真。そこにはまだ少年だった父も一緒に映っている。その写真を手に、私はもうとつづくにその父の年齢を追い

## 小林 エリカ

プロフィール  
1978年東京生まれ。作家・マンガ家。著書『マダム・キュリーと朝食を』（集英社）が第27回三島由紀夫賞、第151回芥川龍之介賞に選出。『放射能の歴史をめぐるコミック』の子ども1、アンネ・フランクと実父の日記を巡るノンフィクション『親愛なるキティーたち』（以上、リトルモエ）、作品集『忘れられない』（青土社）など、ユニット〈kviná〉としての活動も。  
<http://rikakobayashi.com>

越していることに気がつく。そして、もうすぐその祖父の歳さえも追いついていくのだと考える。いま、祖父だけではなく、父ももうこの世にはいない。

東北地方には、ふたたび大きな地震と津波がやってきた。福島第一原子力発電所の事故があり、放射性物質があたり降り降った。

私はその目には見えない「光」を、その歴史を掴みたくて『光の子ども』と『マダム・キュリーと朝食を』というマンガと小説を書いた。

マリ・キュリーが残した実験ノートを見せてもらったことがひとつのはじまりだった。その資料の殆どはバリの国会図書館にあるのだが、どういうわけか一冊だけ東京の大学図書館に貴重図書として保管されていたのだ。白い布張りのノート。表紙を捲ると丁寧な筆記体の文字やグラフが並んであった。そこへガイガーカウンターを近づけると、今も微かに数値が上がる。ラジウムやポロニウムなど放射性物質を扱っていたマリ・キュリーの手が触れた部分の数値が少しだけ高いのだと教えられた。

マリ・キュリーは死んでもうこの世にいない。けれどそこかしこに、いまここに繋がる確実な痕跡がある。目には何も見えない。

14	文化遺産おもてうら 世界無形文化遺産と民族のアイデンティティ ——南部アフリカ、チェワの祭りから 吉田 憲司
16	多文化をあきなう 生産者と消費者を結ぶスタディツアー ——キリマンジャロ・フェアトレード・コーヒーの村へ 辻村 英之
18	味の根っこ ウイスキー、ラム そしてグラッパ 金田 純平
20	人間学のキーワード リスク 木村 周平
21	異聞逸聞 ガーナの楽しい選挙 浜田 明範
22	制服の世界、世界の制服 呪術師に変身! ——東北タイにおけるバーサバイ 津村 文彦
24	次号予告・編集後記

1	エッセイ 千字文 “光”を探して 小林 エリカ
2	特集 未知なる大地 グリーンランド
2	世界最大の島の自然と文化 岸上 伸啓
4	四六〇〇年前からのグリーンランドの歴史 スチュアート ヘンリ
6	グリーンランド・イヌイットの文化 齋藤 玲子
8	世界のなかのグリーンランド ——ニュー・ノース時代の開発と自治 高橋 美野梨
10	集めてみました世界の〇〇 船編 飯田 卓
12	みんなく Information



特集 ※ 未知なる大地

# グリーンランド

## 世界最大の島の自然と文化

岸上<sup>きしがみ</sup>伸啓<sup>のぶひろ</sup> 民博研究戦略センター

グリーンランドは大西洋の北西部にある世界最大の島である。その面積は日本の約六倍もあるが、ほぼ八〇パーセントが厚い氷床で覆われている。現在の総人口約五万七千人のうち九割はイヌイット系の人びとであり、カラリリット（グリーンランド人、グリーンランド・イヌイット）と自称している。彼らはデンマーク王国に属しているが、同国政府と政治交渉の末、一九七九年に自治政府を創設した。かつての狩猟・漁撈<sup>ぎょらう</sup>民は、現在では漁業や水産加工業を中心にさまざまな仕事についている。

わたしたち日本人はグリーンランドの名前は知っているものの、自然や歴史、現状についてあまり知らない。今回の企画展では、グリーンランドをさまざまな面から紹介する。

グリーンランド人による象徴展示  
本展示は導入部に加えて四部から構成される。導入部ではグリーンランドの地理や現状をビデオと地図で紹介し、第一部ではグリーンランド人の世界観をトゥピラク像や仮面、一面太鼓、それらの拡大写真で展示する。また、伝統的なドラムダンス曲を流し、耳からも文化を体感してもらう。

温暖化と寒冷化  
第二部では、グリーンランドの自然と約四六〇〇年におよぶ人類の歴史を紹介する。とくに同島における人類の分布と彼らの活動は、温暖化や寒冷化によって大きく影響を受けてきたことを紹介する。第三部では、一〇世紀後半から一五世紀半ばまでのノース人（バイキング）の活動およびチュレ人が到来した二三世紀以降のグリーンランドの文化を紹介する。第四部では、一九七九年以降のグリーンランドの現代文化について、アート作品、音楽、マンガをとおして紹介する。

展示のみどころ  
本展示にはいくつかのみどころがある。第一は、民博とグリーンランド国立博物館、デンマーク国立博物館との協働展示であるという点である。とくに第一部はグリーンランド国立博物館・文書館の研究者が中心となって自らの文化の展示について企画・立案した箇所である。彼らはキリスト教徒であるが、グリーンランド文化を象徴するものとして伝統的な世界観およびそれに関連するモノを選び、展示する。

第二は、高円宮コレクションやデンマーク王室コレクション、民博所蔵の日本民族学協会附属民族

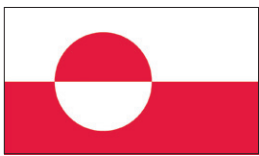
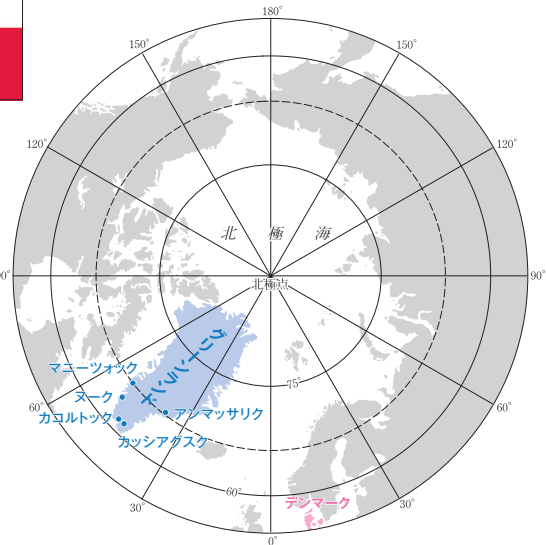
極北の島グリーンランド。大半を氷床が覆う大地には古来さまざまな人びとの往来があり、近年では、そこに眠る資源に注目が集まっている。企画展の開催にあわせて、展示のみどころにはじまり、グリーンランドという土地とそこにくらす人びとの、過去・現在・未来をみていく。

企画展 未知なる大地  
グリーンランドの自然と文化

会期 2014年9月4日(木) — 11月18日(火)  
会場 国立民族学博物館 企画展示場



グリーンランドの夏の風景。首都ヌーク（2008年）



グリーンランドの国旗。1985年に公募によって採択された。赤は太陽、白は氷山を象徴し、氷の大地からのぼる朝日（もしくは落日）を示している

学博物館資料や植村直己資料などから出品する点である。前者の資料には、日本の文化人類学の父、岡正雄<sup>おかまさお</sup>がデンマーク人類学界の大御所カイ・ビルケット<sup>ビルケット</sup>・スミスの資料交換によって入手したグリーンランド資料が含まれている。また、犬ぞりによる北極点への到達やグリーンランドからアラスカまでの極地横断を成功させた植村直己が現地で収集した衣類などを展示する。

第三は、温暖化のみならず、グローバル化の影響を受け、急激に変貌を遂げつつあるグリーンランド社会のようすをポップ・カルチャーなどから展示する点である。

本展示がグリーンランドの自然と文化について少しでも知る機会となり、関心をもっていただければ幸いである。



トゥピラク像  
高円宮コレクション  
(撮影・赤坂友昭)



# 四六〇〇年前からの グリーンランドの歴史

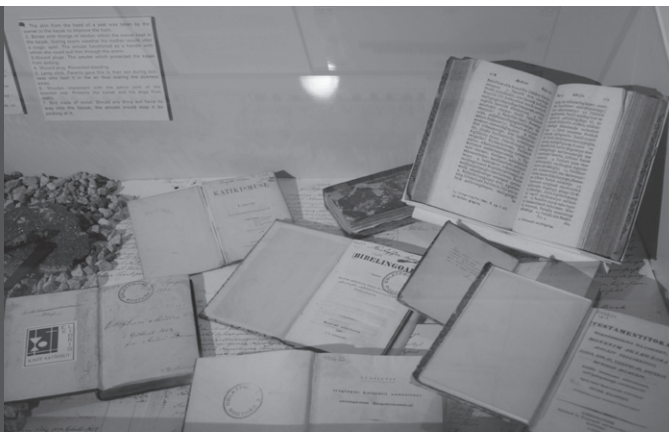
スチュアート・ヘンリ  
放送大学客員教授



カッシアグスクのノース人の遺跡。手前は住居、奥は教会(祠)を復元したものの



エゲデが構えた商港は現在のヌークの元となった



イヌイット語で書かれている19世紀前半の教科書やキリスト教の教理問答書

グリーンランドから消した。犬ぞり、革張りの舟カヤックなど、民族誌に知られる現代まで続く伝統的なイヌイット社会の祖先となったネオ・エスキモーのチュール文化は、約八〇〇年前にグリーンランドに到達した。現在進行中の気候変動に勝るとも劣らない過去の気候変動に応じて、住む地域を変えたり、利用する資源を調整したりして、陸・海・空を縦横無尽に利用してイヌイットは環境の変化に対応してきた。一五世紀のチュール文化の服装、身体装飾や健康状態を示す八体の自然ミイラが西グリーンランドで見つかっている。

## 植民地政策

一六世紀後半、ヨーロッパの捕鯨者が南グリーンラ

約4600～3000年前	インデペンデンスI文化／サッカック文化
約3000～800年前	ブレ・ドーセット文化／ドーセット文化
約800～4-500年前	チュール文化
約1000～600年前	ノース人入植
約500年前～現在	イヌイット文化
1721年	ハンス・エゲデ来島
1953年	デンマークの海外部になる
1979年	自治政府成立

グリーンランドの文化史編年略表

グリーンランドの歴史は、一八世紀後半のデンマークによる植民地化以前にも、いくども大きな社会的、環境的な変化に見舞われた。イヌイット系の住民は三つの異なる集団が入れ替わったし、現在進行中の気候変動に匹敵するほどの環境的な変化もあった。そして、およそ一〇〇〇年前と三〇〇年前の二回、ヨーロッパ人による入植があった。

ここでは、約四六〇〇年前にイヌイットの祖先が渡来した時期から、自治政府が成立する一九七九年に至る歴史を概観する。現在のグリーンランドの住民(国民)は正式にはカラリリットとよばれるが、グリーンランド各地と各時代の先住民を一括してイヌイットとし、ヨーロッパからの移民をノース人(バイキング)やデンマーク人とよぶことにする。

## 先史

グリーンランドの歴史は北東アジアからイヌイットの祖先が渡ってきたおよそ四六〇〇年前までさかのぼる。パレオ・エスキモーともいうインデペンデンスI／サッカック文化に次ぐドーセット文化では、犬はいたものの、そりはなかった。北グリーンランドでは、海獣猟よりも、おもにジャコウウシなど陸の動物を狩猟していた。南グリーンランドのパレオ・エスキモーは比較的恵まれた環境でアザラシをはじめ、海の幸をたっぷり利用していた。

一〇世紀ごろからはまった比較的温暖な中世温暖期に、アイスランドから南グリーンランドに移動してきたノース人が開いた西入植地と東入植地では、羊を中心に牧畜を基盤とした生活であった。最盛期には五〇〇か以上の農場に数千人という規模になったが、気候が寒冷化した一五世紀前半にノース人はその姿を世界経済システムへ次第に編入されていった。

一七二二年に北欧のデンマーク・ノルウェー連合王国のルーテル派宣教師ハンス・エゲデが率いる一行が、布教活動の拠点を築くために現在のヌークの近くに上陸して、植民地を開いた。商業捕鯨などの活動はさらに盛んになり、植民地経済が次第に発展した。デンマークによる支配ではキリスト教化を進められたが、布教活動も学校教育もイヌイット語でおこなわれた。従来への生活への干渉をひかえ、政府への依存を避ける方針に従い、イヌイットの各地の村での生活を奨励して、経済的・社会的な自立を基本とした政策が二〇世紀中葉までつづいた。

## 第二次世界大戦後の工業化

第二次世界大戦中、一時的にアメリカ保護領になったが、デンマーク領に戻ったグリーンランドは、一九五三年に植民地からデンマーク海外部(郡)になった。それまでの伝統生活を温存する政策は、グリーンランドの工業化に切り替えられ、一九五〇～六〇年代に実施された近代化政策は、人口を大きな街に集中させ、漁業、牧羊や地下資源開発を中心とした農業・工業経済の確立を目指した。

一九七九年に自治政府が成立し、二〇〇九年に外交と安全保障を除いた自治に拡大された。



# グリーンランド・イヌイットの文化

さいとう れいこ  
齋藤 玲子 民博 民族文化研究部

グリーンランドは大きな島だけに、地域により自然と歴史・文化に違いがある。ここでは、グリーンランドにおけるイヌイット文化の伝統と現在について、その一端を紹介したい。

## 地域ごとに異なる環境

グリーンランドの内陸は厚い氷に覆われており、人びとは氷がなく資源の豊富な海沿いに暮らしをきた。北部・西部・東部の三つの居住域は氷床で分断され、基層は同じながら独自の文化を発達させてきた。



カヤックの練習をする若者たち。英語でエスキモーロールとよばれる転覆した船を立て直す技法。ヌークの国立博物館近くの海辺で



ヌークの皮工芸組合の建物(手前)。外にはアザラシ皮が干されていた。上方の家の前にはカヤックも見える



結婚式がおこなわれていたヌークの教会前。女性の晴れ着はビーズのケープで飾られ、アザラシ皮製のブーツにも小さく切った皮でモザイク状の装飾が施されている



カコルトック博物館の横に復元されている芝土の家の内部。ヨーロッパ製品が入手できるようにしてから石ランプ(右下の黒い皿状のもの)が使用されていたことを示している

北部は、島の北西部およそ北緯七五度以北の地域で、九か月のあいだ海水に閉ざされる。寒冷な環境に適応した住人は、英語でポーラー・エスキモーとよばれた。生業は氷上のアザラシ猟など海獣猟に加え、陸獣と海鳥の狩猟であった。その地理的条件から外部との接触が少なく、ヨーロッパ人との本格的な交流も二〇世紀になってからだった。日本人にとっては、探検家の植村直己氏や大島育雄氏によって知られる地域でもある。



カコルトック博物館横の家の外観。芝土(ツンドラの表土で草が混じった土)と石を積んで造られている

三地域のなかで最初に植民化が進んだ。人口の大部分は西部に住む。

東部は島の東側ほぼ全域で、アイスランドまで二九〇キロメートルとヨーロッパに面しているが、北からの海流が運ぶ大量の流水にはばまれて航行が困難なため、外界との接触が少なかった。南東部にある集落のひとつアンマツサリクは、一八八四年にデンマーク海軍の艦長G・ホルムが訪れたとき、西部とは比べものにならないほど古い文化を残していた。以降アンマツサリクでは学術調査が重ねられ、収集された標本資料も多く、今回の展示でも出品されている。

## 伝統的なくらし

おもな生業は、数種のアザラシをはじめ、クジラ・イルカ類、セイウチなどで、季節や地理的条件によつて、トナカイやホッキョクグマなどの陸獣や鳥類の狩猟と漁労とを組み合わせていた。アザラシはもともと重要な獲物で、その肉は食料に、脂は燃料に、そして毛皮は、衣類はもちろん、テントや船の覆い、犬ぞりの綱などさまざまなものの素材となった。

かつて夏のあいだは獲物に合わせて移動するキャンプ生活をおこない、冬には村に戻り堅穴式の家に住んだ。一八〜一九世紀になると芝土と石を積んで壁をつくり、デンマークから輸入された材木で屋根をふいた住居が一般的になり、二〇世紀前半まで利用された。家のなかで重要なのは、動物の脂を燃やす石ランプだった。薪が得られない地で、このランプは照明、暖房、煮炊きに欠かせない道具だった。自然のなかから生活の糧を得てきた彼らは、他

## 受け継がれる文化

植民地化以来、生活は徐々にヨーロッパ化され、第二次世界大戦後はそれが急速に進んだ。しかし、イヌイットがマジヨリテイであるグリーンランドでは、ほかのイヌイットがくらすカナダ、アメリカなどの国よりも、伝統的な文化が色濃く残る。

一九九六年に南西部の三つの博物館で調査をした。街を歩くと、イヌイット文化にかかわるものにそこそこで出会えた。首都ヌークの中心部には北欧の店と変わらぬ品揃えのスーパーマーケットがあるが、市場に行けば、アザラシ、イルカ、トナカイの肉や、捕れたばかりのさまざまな魚や鳥が売られている。週末の教会では、結婚式に飛び入りさせてもらった。参列者たちはふだん着だが、新郎新婦と(その親戚だろうか)数人の子どもは民族衣装に身を包み、晴れやかな笑顔を見せていた。家の外にアザラシ皮が干してあったり、バケツいっぱいブルーベリーを摘んで帰るおばあさんに会ったりと、文化が受け継がれていることを感じる場面はたびたびあった。

それから一八年が経ち、温暖化にともなう産業の変化や資源開発の促進など、グリーンランドは重要な局面を迎えている。伝統的な文化と自然とを維持しながら、経済発展をめざす姿に注目していきたいと思う。



# 世界のなかのグリーンランド

## ——ニュー・ノース時代の開発と自治

高橋 美野梨

日本学術振興会特別研究員 PD/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

フロンティアのグリーンランド

資本主義は、「自分たちの外側にある世界」を「自分たちのものにしていく」ことで成り立つ経済システムである。すなわちそれは、あらたなフロンティア（伸びしろ）の存在なくして成り立たない。だから、自分たちの外側にある世界を内部化したとたん、利潤の拡大を図るために、あらたなフロンティアを探し求めていくことになる。

二一世紀の今日、その射程は、厚い氷に覆われた海域という特殊性から市場としての魅力に欠けていた北極海やその周辺地域にまで広がりを見せている。なかでも、北極海に接する世界最大の島グリーンランドは、気候変動の影響に伴う環境変化によって天然資源開発が現実味を帯びてきたことで、欧州諸国や日米を含む多くの国や地域、外国企業からの関心が寄せられている。それに対して、グリーンランド側も、自治政府を中心とし

て、外国資本を積極的に受け入れ始めている。

直近の出来事だけに目を向けてみても、二〇一三年一〇月には、資源開発会社のロンドン・マイニングが、民間開発事業として過去最大の約二三〇〇億円を投資し、首都ヌークの北東一五〇キロメートルにある鉄鉱石鉱山の開発権を獲得した。石油関連企業のシェブロン、シェル、グリーンベックス（日本の官民合弁会社）は、同年一二月、北東部グリーンランド沖合の鉱区を共同で落札し、北極圏開発を本格化させた。南西部の町マニツォックでは、アルミニウム製品の世界的メーカーであるアルコアが、大規模な精錬工場の建設・稼働を目指し自治政府との交渉を進めている。域内での経済活動を示すこのような事例は、枚挙にいとまがない。グリーンランドは、今まさにフロンティアとして大きな注目を集める地域になっているのである。



ロンドン・マイニング社グリーンランド支社代表のカイ・クライスト氏。開発権を獲得したイヌア鉱山の区域図の前で



自治政府前広場に立つ、グリーンランドの説話『みなしごカーサック』のモニュメント。挫折と成功の物語であり、自治のシンボリック的存在となっている

大規模開発プロジェクトの実現に向けて

グリーンランドは、一九五三年のデンマークへの編入を経て七九年に内政自治権を獲得して以降、漸進的に自治の範囲を拡大させ、二〇〇三年には外交・安全保障分野に対する独自の権限、〇九年にはデンマークとの交渉を可能にする権限としての独立権を獲得するまでに至った。しかし、経済的には毎年デンマークからの国庫支出金、政府一括補助金を含め、多額の経済支援を受ける状況にある（グリーンランド国民総生産の約三五パーセント）。それゆえに、近年の北極圏開発の加速化は、この状況を打開する絶好の機会として、グリーンランド自治政府要人を活気付かせている。二〇〇九年から一三年まで首相を務めたクーパー・クライストは、デンマークや米国での学生生活で培った高度な語学力や国際感覚をいかに発揮し、外資を呼び込み、資源収入を得て、経済的に自立していくための政策を推し進めてきた。そのクライマックスは、大規模プロジェクト推進のために安価な労働力を外国から大量に調達することを可能にさせる「ビッグスケール法」の議会採択であった。「地元住民の雇用を奪う」などの批判を受け、二〇一三年三月の総選挙でクライストは失脚したが、翌月に発足したアレカ・ハモン新政権は、「グリーンランド人の雇用を優先的に確保する」ことを謳いながら「初



グリーンランドの自治成立35周年を祝うナショナルデー。2014年6月21日ヌークにて。18世紀以降、コロニーハウとよばれるこの港を拠点に町が形成された

期投資額約九五〇億円超のプロジェクトには外国人労働者の雇用を可能にすることを盛り込む形で同法を受け継いだ。同年一〇月には、二五年間続いたウラン採掘禁止政策（ゼロ・トランス政策）が廃止され、グリーンランドはウランなど放射性物質の海外輸出も視野に入れながら、大規模開発プロジェクトの実現に向け歩みを始めている。

岐路に立つグリーンランド

二〇一四年。グリーンランドは、内政自治権の獲得から三五年の節目を迎えた。北緯四五度線以北の環北極圏を「ニュー・ノース」とよび、今後の国際政治におけるひとつの中心を形成し得ると予想したのは米国の地理学者ローレンス・スミスであったが、果たしてグリーンランドは、外国資本の波に吞まれず、開発と自治とのバランスを考慮した未来図を描くことができるのだろうか。真価が問われる正念場に、今グリーンランドは立っている。



# 集めてみました世界の



いいだたく  
飯田 卓 民博 先端人類科学研究部

世界では、さまざまな材料からさまざまな船が作られている。削り舟や樹皮舟は、細かいパーツを除くと、ひとつの大きな素材を加工して作られる。いっぽうで、複数の材を束ねた筏や、船底部分から板材を上方へ継ぎたして作った構造船もある。板と板の継ぎあわせかたも、鉄釘や木釘で打ったり、幅のある樹皮で縛ったり、あるいは撚り縄で縛ったり、さまざまだ。ここで紹介した船のうちふたつは、展示替えを機に見られなくなってしまう。ぜひ11月4日までに見に来ていただきたい。



## 日本(北海道)

アイヌの樹皮舟。巨木の丈夫な樹皮を剥(は)ぎ、舟型に仕立てたもの。堅い材の部分を素材とするのではなく、しなりのある曲面状の素材を使うという意味では、笹舟を大きくしたものと考えたほうがよいかも。山で大きな獲物を捕らえたさい、この舟を即席で作って川を下ったという。  
H0109341



## インドネシア

トバ湖の削(く)り舟。1本の木材を削りぬぎ、人や荷物を載せられるようにした舟。丸木舟または独木(まるぎ)舟ともよばれる。材と材をつなぐ技術が用いられておらず、簡単に作れるように思うが、丈夫な木を削りぬいでいくには根気がいる。また、大木を材料にしなければならない。  
H0004266



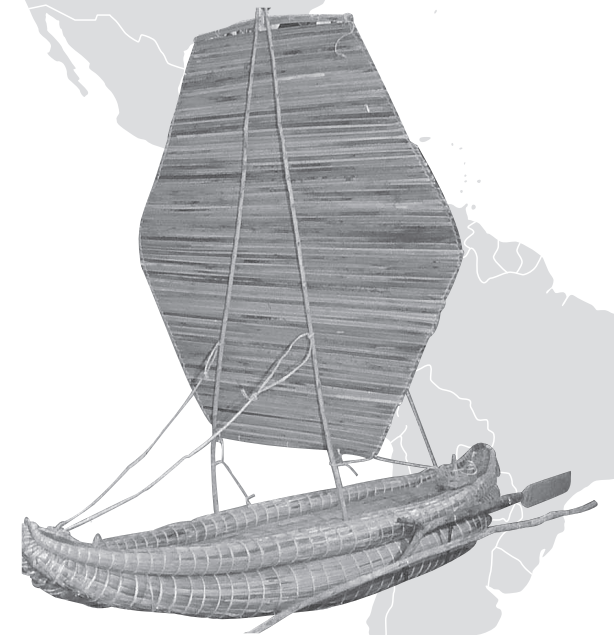
## 日本(新潟県)

佐渡のたらい舟。木材の加工法には、削(く)り挽(ひ)き、曲げ、組み、結いなどの種類がある。削り舟に使われるのが削り、一部の構造船に使われるのが曲げの技術。このたらい舟は、板材をタガで締める「結い」の技術で作られる。サイズは大きいが、たらいや木桶(おけ)と同じだ。  
H0005708



## ミクロネシア

サタウル島のアウトリガー式カヌー(チェチェメニ号)。船体に並行して長い材をそなえた形式の船。カヌーといえば、カナディアン・カヌーやカヤックのように1~2人乗りのものも多いが、このカヌーははるかに大きく、厚い板材を多数繋(つな)ぎあわせて船体としている。1975年の沖縄海洋博覧会のさい、沖縄本島までの3000キロメートルを航海した。  
H0004975



## インド

オリッサ州のテッパ舟。舟ペリをやや高くしてはいるものの、造船技術からみると、くぼみのない大きな木材を複数結わえた筏(いかだ)である。材と材のあいだから浸水してくることがあるが、材そのものの浮力が大きいため、よほどの積載量でなければ材全体が水に浸かることはない。展示場で見られるのは、展示替え前の今年11月4日まで。  
H0163254

## マダガスカル

ヴェズ人のアウトリガー式カヌー。外観はチェチェメニ号に似ているものの、サイズはずっと小さい。削(く)り舟のような形をした削りぬぎ材の上に板を1~3段ほど継ぎたし、へりを高くしている。削りぬぎ材と板のあいだ、および板と板とのあいだには、両端が尖(とが)った木釘が挟まるように打たれている。  
H0267557



## マレーシア

バジャウ人の家船。家船と書いて「えぶね」と読む。移動手段としてだけでなく、住居としても用いられる船。なかは広く、漁具や海産物、日用品が置かれている。東南アジア展示場で、一部を屋外に突きだして展示していたが、傷みが激しいため、展示場で見られるのは今年11月4日まで。  
H0198269



## ペルー

チチカカ湖のあし舟。トトラというカヤツリグサ科の草本を多数束ねあげ、丸太状にしたのち、それを筏(いかだ)のように組んだもの。ただし、いわゆる筏のように平らに素材を並べるのではなく、中央にくぼみができるように並べ、水や荷物が濡れにくいようにしてある。  
H0012645



**特別展**  
国立民族学博物館創設40周年記念  
日本文化人類学会50周年記念

**「イメージの力」**

国立民族学博物館「レクシオン」に「イメージ」の力をはたきやうけとめられ方に、人類共通の普遍性があるのでしようか。

会期 12月9日(火)まで  
会場 特別展示館

**「関連イベント」**

**トークイベント「イメージの力」**

音楽、デザイン、小説の各界で活躍するゲストがそれぞれのイメージの力に迫ります(全3回)。第2回は、三木健さんです。

日時 10月19日(日)13時~14時30分  
ゲスト 三木健(デザイナー)  
聞き手 吉田憲司(本館教授)  
会場 本館ナビひろば  
※申込不要、先着順、本館展示観覧券または特別展示観覧券

**みんなくxナレッジキャピタル「イメージの力」をさぐる**

大阪・梅田のナレッジキャピタルで特別展と連動した連続講座を開催します。(全6回)

時間 19時~20時30分  
会場 グラフフロント大阪北館1F  
ナレッジキャピタル The Labo Cafe Labo  
※参加費500円(ドリンク代)、定員各回50名  
主催 一般社団法人ナレッジキャピタル  
国立民族学博物館

10月15日(水)  
講師 池谷和信(本館教授)  
話題 人類の美の追求  
——ガラスビーズと鳥の羽の世界

10月29日(水)  
講師 山中由里子(本館准教授)  
話題 描かれた時間

国立民族学博物館 特別展ツアー  
10月26日(日)13時~14時30分  
会場 特別展示館  
案内 吉田憲司(本館教授)

お申込み・お問い合わせ  
一般財団法人ナレッジキャピタル  
電話 06・63772・65330

**企画展**

**「未知なる大地」**

グリーンランドの自然、そこに住むイヌイットの人びとの歴史と文化を紹介します。

会期 11月18日(火)まで  
会場 本館企画展示場

**「関連イベント」**

**ワークショップ**

「グリーンランドの映像トウビラックを作ろう」  
紙粘土と竹べらでトウビラックをつくりまわす。

日時 11月2日(日)  
13時30分~16時30分(13時受付開始)  
場所 本館第3セミナー室、企画展示場  
講師 田中誠(版画家)、岸上伸啓(本館教授)

※要事前申込(先着順、参加費500円(別途要展示観覧券)、小学1年生以上対象、定員15名  
お問い合わせ先  
情報企画課 電話 06・6878・8532

**「南アフリカの過去と現在」**

ネルソン・マンデラから続く道  
アバルト(ヘイト)の廃止後、進行する国内の都市化に注目し、持続可能な資源利用や生き方について考えます。

日時 10月11日(土)  
10時40分~13時25分開場10時  
14時15分~16時30分 講演会  
会場 本館講堂(定員450名)  
映画会 上映作品「遠い夜明け」

※申込不要、映画会は要展示観覧券  
国際シンポジウム  
「言語の記述・記録・保存と通モード言語」

手話言語と音声言語を同時に観察することで、言語学における基礎的な概念を再検討します。

日時 10月4日(土)9時45分~17時  
10月5日(日)9時~12時30分  
会場 本館講堂  
※要事前申込、参加無料、英語・日本語・アメリカ手話・日本語同時通訳及び英語同時要約筆記あり

お問い合わせ先  
菊澤研究室 SSI@minpaku.ac.jp

**研究公演**

**「りんげんバンドみんなく公演」**

沖縄の新しい音楽をうみだしているりんげんバンドと小学生の演舞がコラボレーションしたステージです。

日時 11月1日(土)13時~15時30分  
(開場12時30分)  
会場 本館講堂(定員450名)  
申込締切 10月14日(火)

※要事前申込、要展示観覧券  
みんなくワールドシネマ  
「海と大陸」

アフリカの不法移民をかくまうイタリアの島の一家の苦闘を通して、移民問題について考えます。

日時 11月9日(日)13時30分~16時  
(開場13時)  
会場 本館講堂(定員450名)  
※申込不要、先着順、要展示観覧券  
※当日11時30分から展示場ミニレクチャーあり。

公開講演会  
「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」  
ユネスコ無形文化遺産として和食が認定されるなど、いま注目されている無形文化遺産の過去・現在・未来について紹介します。

日時 11月4日(火)18時30分~20時40分  
会場 日経ホール(東京、定員600名)  
主催 日本経済新聞社  
※要事前申込、参加無料  
お問い合わせ先  
研究協力係 06・6878・8209

みんなく創設40周年記念「カレッジシアター」  
「みんなく地球探検紀行」  
10月からプログラムをさらに充実、参加しやすいスタイルで後期講座がスタートします。

時間 13時~14時30分  
会場 あべのハルカス近鉄本館「スペース9」  
主催 産経新聞社  
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団  
※要事前申込(申込締切は各回開催日の1週間前)、参加費 各回1000円

10月8日(水)  
講師 岸上伸啓(本館教授)  
話題 気候変動は何をもたらしたか  
——世界最大の島グリーンランド

10月15日(水)  
講師 八村佳穂(本館教授)  
話題 古代マヤのことはを探る

10月22日(水)  
講師 池谷和信(本館教授)  
話題 人間は何を食べてきたか  
——アフリカの食から学ぶ

お申込み・お問い合わせ  
ウエブ産経カレッジシアター係  
電話 06・6633・9087

**みんなくセミナー**

時間 13時30分~15時(13時開場)  
会場 本館講堂  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)

第437回 10月18日(土)

「企画展関連」はるかなる北の大地、グリーンランドの自然と人びとの暮らし  
講師 岸上伸啓(本館教授)



大西洋の北西部にあるグリーンランドは、世界最大の島です。総面積は日本の約6倍ですが、その80%は厚い氷床に覆われています。そこには約5万7000人のイヌイット人やデンマーク人がくらしています。グリーンランドの大自然の姿、そこに住む人びとの歴史と現状について紹介します。

**みんなくワークショップ・サロン 研究者(話者)**

会場 本館ナビひろば  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)  
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します。「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

10月5日(日) 14時30分~15時30分  
話者 三尾稔(本館准教授)  
話題 ヒンドゥー教世界の神々のイメージ

10月19日(日) 14時45分~15時45分  
話者 林敷男(本館准教授)  
話題 死者を送る——ニューギニアの彫刻と儀式

10月26日(日) 15時~16時  
話者 齋藤玲子(本館助教)  
話題 消費されるイメージ

——観光みやげか博物館資料か

**●展示ガイド更新のお知らせ**

2014年3月に新しくなった東アジア展示の展示ガイド更新版が完成しました。展示ガイド(バインター形式)をお持ちの方には、無料で差し替え分をお渡しいたします。ミュージアム・ショップにお申し出ください。

●南アジア・東南アジア展示リニューアルのお知らせ  
展示リニューアル工事のため、南アジア・東南アジア展示場が11月5日(水)から3月18日(水)まで閉鎖されます。閉鎖前は是非来館ください。

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です  
教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・振興を図ることを目的として設けられ、今年で56回目を迎えます。この機会に、全国で開催される様々な行事に足を運んでみてはいかがでしょうか。

教育・文化週間ウェブサイト(文部科学省)  
http://www.next.go.jp/a\_menu/shougai/kyoiku-bunkai/

吉田憲司 著  
『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』  
岩波書店 3,100円(税抜)

1990年代、聖霊憑依するキリスト教(聖霊教会)へ入信する人びとが爆発的に増加し、南部アフリカ一帯に広がった。それによる伝統的な文化の危機的な状況に、著者は南部アフリカ全域を踏破し、その広がりを追跡しはじめる。本書は、20年の探究調査で見えてきた、宗教の根源=新たな信仰の成立過程を追った知的ルポルタージュである。

刊行物紹介  
竹沢尚一郎 著  
『西アフリカの王国を掘る——文化人類学から考古学へ(フィールドワーク選書10)』  
臨川書店 2,000円(税抜)

サバンナの大地に眠る未知の歴史を掘り起こす。過去にいくつもの王国が生まれながら、文書史料に乏しく、未発掘の地が多く残るマリ。アフリカの過去を知りたい、その一念で専門外であった発掘に乗り出した著者は多くの新発見に恵まれることとなる。そしてついに、西アフリカ初となる「中世」の王国を掘り起こす。

**友の会**

**友の会講演会(大阪)**

会場 本館第5セミナー室  
定員 96名(当日先着順、会員証提示)  
第437回 12月6日(土)14時~15時

**ナラ林文化を再考する**

講師 佐々木史郎(本館教授)  
佐々木高明元民博館長が想定した、日本文化の北のルーツ「ナラ林文化」。該当地域の生態環境や歴史の変遷をふまえ、「ナラ林文化」という文化領域設定の可能性を改めて検討します。

◇11月の第一土曜日は、「りんげんバンドみんなく公演」にご参加ください。

会員の方は、事前に友の会事務局までお申し込みください。(締切:10月14日(火))

**東京講演会**

会場 モンハル渋谷店5Fサロン  
定員 60名(要事前申込)  
※一般の方も参加可能です(参加費500円)  
第110回 10月19日(日)14時~15時

**多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業**

講師 菅瀬晶子(本館助教)  
日本有数の多みんぞくの街、東京都新宿区の新大久保。本講演では、新大久保が多みんぞくの街となった歴史を振り返るとともに、近年もっとも活気のある「イスラム通り」に注目します。当日は、ハラールフードのサンプルも実際に手にとっていただきます。

**第69回体験セミナー**

「織り」からたどる手仕事の現場(国内編)  
11月20日(木)~21日(金)  
訪問先: 桐生市、高崎市、中之条町(群馬県)

**第85回民族学研修の旅**

「織り」からたどる手仕事の現場(海外編)  
2015年2月1日(日)~2月9日(月)  
訪問先: カンボジア、東北タイ

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。



# 世界無形文化遺産と 民族のアイデンティティ

## 南部アフリカ、チェワの祭りから

よしだ けんじ  
吉田 憲司

民博文化資源研究センター



芸能や祭事は、人びとの結束を高める。逆に、結束を生むために芸能や祭事が考案されることもある。現代に生み出されたものでも、担い手にとっては、かけがえのない文化遺産だ。

### 民族単位の祭りの創造

南部アフリカのザンビアでは、一九八〇年代、主要民族が、「伝統を始めよう」をスローガンに、競って民族単位のあらたな祭り



第1回チェワ人の祭り「クランバ」。ザンビア、ムカイカ村にて（1984年）

を生み出していった。わたしが過去三〇年間かかわってきたチェワの人びとも、その動きのなかであらたな祭りを作り上げた集団のひとつである。

チェワの人びとが創始した祭りは「クランバ」という。「伝統を始めよう」をスローガンに、本来は葬儀の際に踊られる仮面舞踊「グレワムクル」と、女性の成人儀礼の際に踊られる女性の踊りを、それぞれの地域のチーフが王ガワ・ウンディの前で披露するという祭りである。わたしは、その第一回のクラン

バに立ち会った。一九八四年のことである。その折、あと五〇年もして人類学者がやってきたら、きっとこの祭りがチェワの伝統的な祭りだと思ひ込むだろうなど、村人たちと笑いながら語り合ったものである。それから三〇年、すでにクランバは毎年八月最後の週末に開催され、「チェワ伝統の祭りクランバ」と称されて定着するにいたっている。

### 仮面舞踊の世界無形文化遺産指定

多くの民族のあいだで進んだ、こうした祭りの創生は一九九〇年代に入ってひと段落する。そ

バに立ち会った。一九八四年のことである。その折、あと五〇年もして人類学者がやってきたら、きっとこの祭りがチェワの伝統的な祭りだと思ひ込むだろうなど、村人たちと笑いながら語り合ったものである。それから三〇年、すでにクランバは毎年八月最後の週末に開催され、「チェワ伝統の祭りクランバ」と称されて定着するにいたっている。

設計図も出来上がってきている。三〇年前、わたしが調査を始めたときには、チェワという集団のあいだに仮面舞踊の伝統があること自体、ザンビアの外では、ほとんど知られていなかっただけに、感無量の思いがある。

### 祭りへの三か国の大統領の参列

チェワの人びとのあいだでは、二〇〇七年のクランバで、さらに画期的な展開が見られた。チェワの人びとは、現在、ザンビア、マラウイ、モザンビークにまたがって住んでいるが、ザンビアでおこなわれたこの年のクランバの祭りに、これら三か国の元首、大統領がごぞって参列したのである。このようなかたちで、ひとつの民族がまたがって住んでいる国の元首が、その民族の祭りに集うということとは、アフリカの歴史上、初めての出来事であろう。各国の元首は、それぞれ、やはりチェワ

の踊りの世界無形文化遺産指定を例に出し、チェワだけではなく、すべての民族の伝統文化の重要性の再認識の必要性を訴えるものであった。さらに、祭りのなかでは、それぞれの大統領に引き連れられるかたちで、ザンビア以外のチェワのチーフも、自分たちの地域のニャウの踊りと女性の踊り手を帯同し、ザンビアのチェワの王ガワ・ウンディの前で舞踊を披露させた。チェワの人びとは、自分たちがチェワ語をしゃべり、緩やかに同じチェワだという意識はもっているというものの、三か国にまたがるチェワが、ザンビアのチェワの王のもとに統合されているという認識は、これまで



3か国のチェワの舞踊を見守る、ザンビアのチェワの王ガワ・ウンディ。ザンビア、ムカイカ村にて（2007年）

かたちで、ひとつの民族がまたがって住んでいる国の元首が、その民族の祭りに集うということとは、アフリカの歴史上、初めての出来事であろう。各国の元首は、それぞれ、やはりチェワ



王ガワ・ウンディの前で舞踊を披露するニャウの踊り手「マカンジャ」。ザンビア、ムカイカ村にて（2007年）



# 生産者と消費者を結ぶスタディツアー

——キリマンジャロ・フェアトレード・コーヒーの村へ

辻村 英之

京都大学准教授

フェアトレード商品の生産地を消費者が訪れ、現地を体験的に学ぶスタディツアー。消費者と生産者との交流は、お互いに何をもちたらずの。タンザニアのフェアトレード・コーヒー産地のひとつ、ルカニ村の事例を紹介する。

## 「子どもと森林を育む」

### 「コーヒーのフェアトレード」

わたしが一九九六年から調査を続ける、タンザニア・キリマンジャロ山の西斜面にあるルカニ村。日本で高い人気を誇るキリマンジャロ・コーヒーの産地である。教育熱心な村民は、子どもの学費をかせぐためにコーヒーを育てる。そして直射日光を嫌うコーヒーの木は、森林の木かげで育てられる。

しかし九〇年代以降、コーヒー価格の低迷が目立つようになった。特に二〇〇一〜二〇〇二年の「コーヒー危機」においては、国際価格が史上最安値の水準にまで暴落した。

多くの村民が、もはやコーヒー生産では学費をかせげないと判断し、離農して街に移るか、トゥモロコシに転作した。トゥモロコシは直射日光を求めるため木かげが邪魔になり、森林伐採が進んでしまった。

「子どもと森林を育む」コーヒーを再生したい。ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトを始めたゆえんである。

## コーヒーのあらたな品質

このように、国際基準よりも高い輸出価格と報奨金を支払うことで、ルカニ村産コーヒーの「子どもと森林を育む」特性がよみがえりつつある。残された課題は、この「子どもと森林を育む」特性を、味・香りに上乗せされたコーヒーのあらたな品質だと理解し、積極的に代金を支払う消費者を増やすことである。

日本政府も二〇一二年、「消費者教育の推進に関する法律」を施行し、倫理的、社会的、経済的、環境的配慮に基づいて購買行動をおこなう「消費者市民」の育成を重視しはじめた。しかし長引いた不況の影響で「よいものをより安く」の購買行動が強まっており、「社会的によいもの」に代金を支払う「消費者市民」の増加を阻害している。フェアトレード・コーヒーのなかでもより高価な（それゆえ強い生産者支援力をもつ）ルカニ村産コーヒーも例外ではなく、二〇一二年に年間一八トンから一二トンへ、購入量を減らさざるを得なくなった。

## スタディツアーの意義と影響

そこでわたしたちは、日本において「消費者市民」やフェアトレードの自発的発展を促す基礎として、世界に名高い有機農業運動の「産消提携」や生活協同組合の「産直」を位置付けるべきと考えた。それらが重視する生産者と消費者の交流、お互いの顔（生活や価値観など）の見える関係により、生産者の生産・生活を「買い支えたい」消費者の気持ち芽生えたと考えたのである。「コーヒー・スタディツアー——キリマンジャロ・コーヒーの

## 生産者を支えるふたつの方法

フェアトレードの国際認証基準は、コーヒー生産者や産地を支えるために、コーヒーの最低輸出価格（一ポンドあたり一ドル四〇セント）を保障すること、フェアトレード報奨金（一ポンドあたり二〇セント）を支払うこと、を規定している。

わたしたちのプロジェクトでは、一ポンド当たり二三セントの報奨金を、ルカニ村の社会（特に教育）開発のために支払っている。これまで、図書館・中学校の建設、保育園の教材購入、コーヒー加工・育苗場の整備、新品種の苗木普及などを促してきた。そして最大の特徴は、農協の役員と話し合っ、二人の子どもの教育費（特に中学校の学費）を各農家が捻出できるコーヒーの販売価格の水準を見出し、その生産者価格を実現する輸出価格（一ドル七一セント/ポンド）を、最低価格として保障していることである。

ルカニ村民はコーヒーの生産意欲を取り戻し、トゥモロコシからコーヒーへの再転作、そしてコーヒーに木かげを与えるための植林をはじめている。村ルカニへ」は、こうして始まった。

参加者はルカニ村に四泊し、コーヒーの収穫・果肉除去・水洗・乾燥・出荷を体験できる。出荷先の農協においては、役員と意見交換の場が設けられる。生産者はコーヒーを高く買い続けてくれることを消費者に感謝し、消費者はおいしいコーヒーを売り続けてくれることを生産者に感謝する。この感謝の交換が常だが、場合によっては、価格・品質についての激しい議論になることもある。価格・品質をめぐる消費者の当事者意識が高まる貴重な機会になる。

報奨金で支援している図書館、中学校、保育園、コーヒー加工・育苗場も訪問する。有機農業や森林保全に興味をもつ参加者が多いため、あらたに有機コーヒー生産をはじめた農家や、あきらめずに森林の木かげでコーヒーを生産し続けた農家も、主要な訪問先になる。それを眺めている村民は、自らのコーヒーの愛飲者が、有機・森林コーヒーを好むことを知り、主体的に有機栽培や植林に努めるようになっていく。

ルカニ村滞在中、子どもと森林を育む」品質を実感できた参加者は、流通するルカニ村産コーヒーを追いかけるように、街にあるコーヒーの加工・選別工場や競売所へ向かう。そして帰国後も、この愛着あるコーヒーを追いかける参加者が多い。飲み続けるのはもちろん、学生の参加者は学祭やイベントでコーヒーを売り、自家焙煎店やフェアトレード・ショップの参加者は、取扱量を増やしてくれる。そのおかげで二〇一四年初夏、再度一八トンのルカニ村産コーヒーが日本に到着したのである。



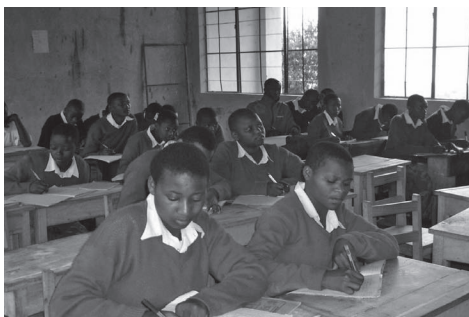
ルカニ農協の役員との記念写真



園児との交流



コーヒーの収穫体験



報奨金で支援したルカニ中学校の建設(上下)



トゥモロコシに転作した若手農業者の畑（後方は従来のコーヒー畑）



# 味の根っこ



日本の洋酒

## ウィスキー、ラム そしてグラッパ

かね だ じゅん べい 民博 機関 研究員  
金田 純平



国産のラムばかりを並べた。それぞれ特色がよくでている

### 世界に認められるジャパニーズウィスキー

この秋から放映されているNHK連続テレビ小説「マッサン」は、ニッカウヰスキーの創業者・竹鶴政孝（一八九四—一九七九）とその妻リタの人生をもとに翻案したドラマである。竹鶴はウィスキーの故郷・スコットランドでウィスキーの製造を学び、山崎蒸溜所の設計と運営に携わったのち独立して北海道余市町に蒸溜所を築いた。日本のウィスキーは今や質量ともに世界で認められるものとして成熟しているが、それは竹鶴の功績なしに語ることはできない。

### 国産洋酒

欧米を中心に生産・消費されてきた酒類は洋酒とよばれるが、この語が使われる場合ウィスキーやブランデー、ウォッカやラムなどの蒸留酒を指すことが多い。日本でもウォッカやラムが製造されている。この「国産洋酒」を推進しているのは、大手よりもむしろ地方の中小の酒造業者であるのが特徴的である。

奥飛騨酒造（岐阜県）は清酒のほか、米を原料としたウォッカの製造を一九六〇年ごろからおこなっている。六年熟成の「奥飛騨VODKA」は五五度という強さにもかかわらず、舌触りがなめらかで味が柔らかくたいへん飲みやすい。米を原料とする清酒の良さが取り入れられている逸品である。

ラムは原料のサトウキビが採れる沖縄や奄美、小笠原でも製造されている。南大東島のた、国際的に評価されることはこの両方に直結するため、大手も中小もこぞって国際品評会に出席している。「ナインリーブス」（滋賀県）のように、二〇一四年に開催された国際ラム品評会で連続受賞するなど、最初から世界を意識した酒造りをおこなっている業者も登場している。

さらに、国際競争も過熱してきている。ウィスキーも次の勢力としてオーストラリア、インドそして台湾などが台頭し、世界市場へ高級品を投入している。スコットランド生まれのウィスキーはもはや生産もグローバル化している。ジャパニーズウィスキーも決して安泰ではない。

### 国内志向の河内グラッパ

大阪の河内地区はブドウの産地でありワインが造られているが、蒸留酒もブランデーのほかにもブドウの絞りかすによるグラッパが製造されている。柏原市のカタシモワインフーズの「葡萄華」は、本場イタリア産に負けない香りを醸しながら同時に清酒や焼酎のような柔らかさを兼ね備えた名品である。グラッパの製造に使う蒸留器はイタリアから取り寄せたものではなく、社長自らの手で制作したものだという。

海外展開について醸造部の高井さんに伺ったところ、意外にも今のところ考えていないという回答であった。生産規模が小さいことも理由のひとつであるが、それよりも「日本人の味覚に合うワインを作る」という同社のモットーが、国産・大阪産を強く打ち出した商品づくりと手



かつて使用されていたワイン醸造用具（柏原市・カタシモワインフーズ）



奥飛騨 VODKA。ロシアンウォッカのように舌にどっしりとした重みと刺激を与えるのとは対照的に柔らかく優しい舌ざわり



COR COR（コルコル）をつかったオリジナルカクテル「ダイキリ沖縄風」。沖縄のものばかりでつくってもらった。ショットバー「RIVER」（兵庫県尼崎市）にて

「COR COR」（グレイスラム）は、カリビアン・ラムに比べてサトウキビの香りが強く、また、奄美の黒糖焼酎とは違った味わいのある面白い商品である。

### 国際化する酒造り

酒は本来その生産地（つまり本場）と強く結

製の蒸留器にもあらわれている。

### ふたつの潮流の接点

現在の洋酒造りには、海外向けに洗練させていくことと、国内向けにユニークな商品を作ることこのふたつの潮流がある。いずれも高付加価値化の戦略であることに違いはない。わたしのような酒飲みにとって、高品質でバラエティに富んだ酒が飲めるのは楽しいことこのうえない。

### ダイキリ沖縄風 (Daiquiri Okinawano)

COR COR ラム (インダストリアル) 50ml	① 材料をシェーカーに入れてシェイクする。
シークワサージュース (生搾り) 10ml	② カクテルグラスに注ぐ。
きび砂糖 1つまみ	・通常のダイキリよりもラムが若干多く、やや強いです。アルコール度数を抑えるならラムを45mlにして、ガムシロップを5ml程度追加します。
	・黒糖カステラや紅いもケーキなどしっとりしたお菓子とあわせるのもおすすめです。



それにしても、日々なかなか明るいニュースに出会わない。ブラック企業から自然・人為災害、そして緊迫する国際情勢まで、これからの社会や自分の人生がどうなっていくのか、不安な気持ちを抱えている人も少なくないだろう。リスクということばは、そんな時代の雰囲気につくりくられるせいも、日常的にもよく使われる。

では、リスクとは何なのか。将来的に自分の身に起きるかもしれないよくない出来事なのか（失業のリスク）、それか起きる確率なのか（喫煙の発がんリスク）、よくないことを引き起こす確率が高い何かのことなのか（飲酒運転はリスクだ）、それとも一か八かの決断のことなのか（リスクを取る）。考え出すと、アウグスティヌスの有名なことばよろしく、わかっていたはずのものがするりと逃れていく。かといって、抱えていた不安が消え去るわけでもない。

ここでは乱暴を承知で単純化して考えよう。

人間の生活は、多かれ少なかれ、つねに未来に対する不安を伴っている。そうした不安に対して人は思いをめぐらせたり、何かしら備えたりしている。リスクを広義にとったとき、リスクとはこの、不安な未来の出来事や、それに対する「構え」を指す。

それに対し、リスクというものをより限定的に捉える見方もある。そのポイントは、未来に起きうる問題を、確率・統計理論などをもとにして客観的に比較可能なカタチ（た

## リスク Risk

木村 周平 きむら しゅうへい 筑波大学助教

### 人間学の キーワード

転ばぬ先の……

たとえば数値）に変換する、という手続きを含んでいることである。この、一種の科学的なツールとしてのリスクは、ある出来事が起きる前に、それが実際にどれほどの被害をおよぼしうるのかを評価したり、社会的に許容できるレベルを考えたり、社会としてあるいは個人として、わたしたちが取るべき対応を決めたりすることを可能にする。ただし、このツールを用いた対応の成功・失敗は、「自覚的・合理的な意思決定の結果」だとして、その人の責任に帰されるようになる、という側面もある。

現代社会においては、後者の意味でのリスクが社会のさまざまな局面・領域に浸透しつつある。このこと自体は、必ずしも悪いことではない。しかし問題なのはそこで生じているふたつのことである。ひとつは、科学技術の発展に伴う新しい複雑な事態（環境破壊や原発事故など）が、このツールでは十分に被害を把握したり、対応したりできない側面があること。もうひとつは、リスク計算にもとづく能動的で自由な意思決定が称揚される一方で、「社会」というセーフティネットが機能しなくなり、結果的に弱者が切り捨てられてしまうことである。これらは現代社会の避けがたい帰結のようにみられるが、本当にそうなのか。わたしたちは「リスク」ということばで何かを説明しようとするまえに、そのことばによって何が説明されたことになってしまっているかを考えてみる必要がある。



# ガーナの楽しい選挙

はまだ あきのり  
浜田 明範 民博 機関研究員

## 音楽をかける選挙カー

二〇二二年二月、ガーナ共和国では大統領選挙がおこなわれた。一九九二年に民政に復帰してから六度目となる大統領選挙は、投票後に多少の混乱が見られたものの、おおむね平和裏に実施された。これをうけて、ガーナの民主主義は徐々に成熟してきているという認識が、欧米でも一般的になりつつある。しかし、選挙活動をつぶさに見てみると、人びとは選挙に真剣に取り組むというよりは、楽しんでいようだ。

選挙日が近づいてくると、ゆつくりと町中を移動する選挙カーに頻繁に遭遇することになる。選挙カーには、候補者の顔写真とキャッチフレーズが張られ、スピーカーが備え付けられている。荷台にプラスチックバンドを載せた小型トラックが使用されることもある。いずれの場合も、重要なのは大音量で音楽を流すことだ。実際、たとえ直接目にするのがなかったとしても、選挙カーが近づいてくると、すぐに気づくことができる。人びとは、その音楽にあわせて歌を歌い、ダンスをしながら行進する。人数が少ない場合は選挙カーの後ろに

列をなしているが、次第に群衆が集まってくると、選挙カーの前や横にも陣取って大騒ぎをしながら行進が続けられる。



ガーナの選挙カー。スピーカーから流されるのはことばではなく音楽である。2012年12月1日、ガーナ共和国ブランカシ町にて

## 踊っているのは誰か

しかし、このような熱狂的な選挙活動に参加している人びとは、必ずしも特定の政党を支持しているわけではない。選挙カーの周囲で踊る人びとや、行進に向けて手を振っている人びとはそれぞれの候補の支持者であるはずだ。しかし実際には、自分が支持する候補でなくても、一緒になつて騒ぎ立てる者も少なくない。選挙キャンペーンを真剣に楽しむことと、政治的に真摯であることは必ずしも一致しないのである。

ガーナの人びとにとって、選挙は純粋に楽しいものだ。そう聞くと、どこか不真面目な印象をもたれるかもしれない。しかし、ガーナの大統領選挙の投票率は八〇パーセントに達する。そうであるならば、むしろ日本の選挙にはおもしろみが少し欠けているようにも思えてくるのである。





## 呪術師に変身！——東北タイにおけるパーサバイ

津村 文彦 福井県立大学准教授

万能という、夢のある触れ込みにはいかがわしさがつきまとうものだが、たしかにそこには万能と云っていい布がある。一枚の布が頭巾、腰帯、バスタオル、手ぬぐい、風呂敷、制服など何役もこなし、いかようにも人を変身させてくれるのだ。しかも面倒なコツもいらぬ。

### 万能布パーカオマー

東北タイの呪術師のところで話を聞いていたときのこと。頭から血を流した老人が訪ねてきた。草刈りの途中で、物が倒れてきてぶつかったらしい。呪術師は壁に掛けてあった布を取り、さっと自分の肩に掛けて、患者の傷口の処置を始めた。彼は、呪文を唱え息を吹きかけて、外傷や骨折、毒蛇の咬傷までも治す術をもっている。気になったのは、治療儀礼のときに肩に掛けた、お世辞にもキレイとはいえない布のことだ。それは東北タイではどこでも見かけるチェック柄の木綿の布パーカオマーであった。

パーカオマーはさまざまな用途に役立つ農民の必需品だ。暑い日には頭に巻いて帽子代わりにするし、腰に巻いてベルトにしたり、水浴びのあとの体拭きにも、手ぬぐいにも、物を包む風呂敷にも用いられる。呪術師はそんな何でもない万能布をわざわざ肩に掛けてから治療儀礼を始めたのだ。いったいなんのために？

さを演出する。また僧侶の説教を聞くとき、僧侶の托鉢に布施するときなど、仏教に関係するイベントでは、多くの人が布を肩に掛ける。村の暮らしてもオシャレに気をつかう女性たちは、白い綿のレース地のパーサバイを身にまとうて寺に向かう。

とはいえ、日常生活のなかでは、肩掛け布は「肩に掛けること」が最重要で、素材や模様は二の次であるようだ。たとえば、村の葬儀のこと。火葬台で故人に最期の別れを告げる参列者たちを眺めてみると、肩掛け布にはかなりの融通がきくようだ。本来は「僧衣のように左肩に掛けるもの」とされるが、右肩に掛けたり、はたまた暑い日の汗拭きタオルのように首に掛けている者までいる。使われている布もさまざまだ。白い綿のレース地はむしろ少数派で、万能布のパーカオマー、普通のタオルまであるではないか。しかも色も白とは限らず、青やピンクのタオルも。とにかく何かの布を肩に掛けることが大切なのである。

### とにかく何かの布を肩に掛ける

パーカオマーにかぎらず、肩掛け布は、タイ語で「パーサバイ(サバイ布)」「パーパートバー(肩に掛ける布)」とよばれる。もとは僧衣で、左肩に掛ける布を指していたようだが、俗人も寺に参るさいに古くから身に付けてきた。寺という神聖な場所では、純粹さを象徴する清潔な白い布が好ましく、僧侶と仏陀に敬意を表するのにふさわしい衣装と考えられている。しかし信仰心を象徴する小道具というだけではなく、オシャレの要素も大きい。結婚式などで伝統衣装を着るときには、金糸で模様が施された美しいシルクの布を、左肩と右脇腹に褌のように通して、長く後ろにたなびかせて優雅

### 聖なる力そのもの

呪術師の話に戻ろう。彼によると、肩掛け布は、清潔であればなんでもよいが、布を身にまとうてから術をおこなうのが手順のようである。布をまとうことで宗教的なモードに変わるといのは、変身ヒーローの小道具さながらである。呪術師は言う。「呪術師になる儀礼」のときに、肩に掛けた白い布は取っておかなければならない。その布を捨ててしまえば、呪術師の身体から聖なる力は消えて無くなってしまふ。あの布は聖なる力そのものである。

そういえば十数年前に調査の過程で、わたしが呪術師に弟子入りをしたときも、師匠が用意してくれた白い布を肩に掛けて呪術師になるための最後の儀礼に臨んだ。あの薄汚れた白い布がそんなに大切なものだったとは。いったいどこにしまったのか、覚えがない。変身ベルトを無くしてしまつては呪術師失格である。



毎年5月に開かれる年中行事ブンパンファイ(ロケット花火祭り)での行列



村の葬儀で故人に最期の別れを告げる人びとの肩に掛かるタオル



薬の力を強めるため術をおこなう呪術師

土地の女神に祈りをささげる呪術師



## 編集後記

企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」には、高円宮殿下と妃殿下がグリーンランドで集められたトウピラクが展示されている。同展の開幕式で日本語と英語の両方で挨拶された妃殿下の“custodians of the ice”というお言葉に非常に感銘を受けた。グリーンランドからの来賓に語りかけるように、氷に覆われた大地での暮らしは大変であろうけれども、温暖化が進む地球全体にとって極地の氷は大切なので、これからも氷を守ってください、とお話された。この「氷の守り人」たちの歴史や文化を、企画展や本号の特集を通してぜひ知ってほしい。

特別展「イメージの力」もオープンした。新美術館での展示に比べて見劣りがするのではないかと気がかりであったが、面積が狭い分、モノとの距離感がぐっと近くなり、細部が迫ってくる迫力がある。東京では真っ白い空間の中で少し背伸びしていた展示品が、こちらでは暖かい光につつまれていて、布や羽の発色もよい。「六本木の豪邸もすばらしかったけど、千里の実家はやっぱり落ち着くわ」とモノたちが言っているような気がする。

(山中由里子)

●表紙：夏のグリーンランドの風景。ヌークにて（2008年、撮影・岸上伸啓）

## 次号の予告

特集

## 疫病

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

## みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、「月刊みんぱく」や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

## 月刊みんぱく 2014年10月号

第38巻第10号通巻第445号 2014年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子（編集長） 櫻永真佐夫 河合洋尚  
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 丸川雄三  
編集アドバイザー 山内直樹  
デザイン 宮谷一 款 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

